

特集

脅威となった中国

日中が敵対する時代

不穏な動きを見せる中国外交の狙いを有識者に問う



おかざき 久彦
おが さき ひさ ひこ

●元駐タイ大使

日米同盟が目障りな国



なかじま 敏雄
なか じま みね お

●東京外国語大学教授

米中对決が始まった



(取材・構成)
うしば あきひこ
牛場昭彦
(産経新聞編集委員)

この秋、日本外交は手痛い黒星を喫した。
エリツイン・ロシア大統領の来日中止だ。

これについては、「軍部・保守派の力に押しきられた」「日本が北方領土問題で対応を誤った」「経済のいっそうの悪化で、来日どころではなくなった」「日本への揺さぶり」など、さまざまな「後知恵」的解説がなされている。



“中国式”社会主義の手品

わたなべ としお
●東京工業大学教授

過去を謝る必要はない

わたなべ しやういち
●上智大学教授

“天国”に引き込まれた韓国

おこのぎ まさお
●慶應義塾大学教授

底流としての米中再接近

ながにしる まさ

外交は相手のあることであり、首脳の外国訪問が取りやめになった例はほかにもあるから、とりわけて深刻に受けとめる必要はないが、それでもあえて“黒星”といったのは、今回のような事態が起きる可能性を、政府がまったく予見していなかったからにほかならない。

これは、とりもなおさずロシア国内の政治・経済状況、エリツィン大統領の人物、ロシア人の民族性、その他もろもろについて適確な情報収集、分析が行われていなかったことを物語っている。「領土問題の解決は、いまが潮時だ」などというすつとんきような情勢認識を示し、国民をミスリードした宮澤首相の責任は、とりわけ大きい。

同じ過ちが、天皇・皇后両陛下の中国御訪問にかかわる情勢判断でも、繰り返されていたという恐れはないのだろうか。

東西冷戦の終結後、中国の動きにはただならぬものがある。突如、尖閣列島や南沙群島の領有を主張しはじめたかと思ふと、電撃的に韓国との国交を樹立。国内では大軍拡を続ける一方、米国などが厳しく糾弾している人権問題や武器輸出では、むしろ開き直りの姿勢を見せている。

いつたい、中国の狙っているものは可

で、日本はどう位置づけられて、



米中対決が始まった

なかじま りょうへい
中嶋嶺雄

●東京外国語大学教授

——中国はいま大きく変わりつつあるといわれていますが。

中嶋 中国社会はたいへんな実利社会に急速に転換している。いま、何が民衆レベルをいちばん動かしているかというところ、いつてみれば金儲けです。拝金主義。

革命国家だからイデオロギーによって動いてきたはずなのに、それでは何も変らなかつたし、動かなかつた。ところがひとたびお金を儲けていいとなつたとたん、中国社会は内部からほんとうに動きだした。そもそも共産主義は、中国民族にとってはもつとも縁遠いものなのです。

——そうなる、もう共産党はもたない。

中嶋 革命第一世代が総退場するのは数年のうちです。そのとき革命の総決算が起るのではないか。共産党がうまくいってやっていたならともかく、その政策は何ひとつ成功していません。成功している部分は資本主義的な要素を取り入れたところだけですからね。中国共産党は解体していかざるをえない。

——その後はどうなりますか。

中嶋 たいへんな激動が起るでしょう。第二、第三の天安

門事件がもつと大きな形で起る可能性は高い。なかで、あの国が一つにまとまっていくことは難しいから結局、一種の連邦制みたいな形になっていく。実質的にはもうそうなっていると思います。

——そうなる、群雄割拠で始末におえないことになり、日本にも影響が及びませんか。

中嶋 群雄割拠といつても、軍事的にチャンチャンバラバラやるということではなくて、それぞれが一生懸命金儲けに血道を上げるといふ形でしょうから、いわば中国国内の混乱であつて、それが日本の安全保障上の脅威になるような混乱はないと見ています。

——間尺に合わないことはやらなくなっている。

中嶋 中国の人たちがみんな賢くなつていくということがあると思う。自分の生活や金銭感覚に基づいたリアリズムでですね。

——そのことと軍備拡張との関係は。

中嶋 べつに矛盾はありません。天安門事件のように民主化運動があるわけですから、いまの政権としては絶対にそれは抑えこまなければならぬ。同時に湾岸戦争以来、中国の世界認識が変つてきた。

あれによってアメリカのハイテク技術の優秀性を思い知らされた。やっぱりアメリカは凄いと感ぜになつていく。そこへもつてきて、ソ連がなくなつてしまつたため、アメリカ

力にとって中国の価値が低下した。そのことがF16の売却などとなって出てきていると見るわけです。

そうした現象を踏まえて中国は、アメリカが単独覇権を狙っているものと見て、それに対する戦略を構築しようという気持になっていると思います。兵器を買いこむ、いちばん弱かった海軍を増強する、武器を売って仲間を増やしていく。それがさらに尖閣列島や南沙群島の問題につながっていると見えています。

——アメリカとは妥協ではなく対決ですか。

中嶋 対決していく方向が、このところ着々と見えてきているように思います。アメリカと妥協するためには、民主化という大きなハードルがある。いまの指導者としてはそれやると体制がひっくりかえるという認識ですから、抑えこむ。その限りでは米中関係はよくなるのではないではないですか。

——そうしたなかでの御訪中は……。

中嶋 世界が日本と中国だけなら中国に擦り寄るのもいいけれど、心配なのは西側諸国、とくにアメリカの反応です。そういうところまで考えておかないと。

中国は韓国を巻きこんで、できれば日本も巻きこんで中国の土俵に上げるというのが狙いでしょう。日本はよほどしつかりと、西側の一員だ、そして日米関係を基軸にするのだというポリシーを掲げておかないと、中国のペースにはまっ

いく。

それと関連していえば、中国がいま盛んに「日本の政治大国化は望ましい」といいはじめているのが気になる。軍事大国は困るが政治大国はいい。できれば中国と一緒にやってくれということでしょう。

これに対して欧米には、一種のアジア主義への警戒があると思います。政治大国あるいは軍事大国になろうとしている中国と、経済大国の日本が組んで何かアジアで不気味なことをしているのではないかといいかねますね。東アジア経済構想にアメリカがあれほど反対するのも、そういう警戒心が強いからです。

世界的にそう見られているわけですから、日本はグローバルな立場に立ち、自由や平等、価値の多元化といった原則に徹底的に忠実であることをますます明確にしておかないと、とんでもないことになっていってしまふ。

——人権問題はその意味で日本に対する「踏み絵」でもあるわけですね。

中嶋 人権問題は地域によって違いがあるというものはなく、まさに国境を超えた義務です。だから、中国の人権は中国が決めるなどというのは、とんでもない話で、こういう問題に対しては日本はきちんと中国に迫るべきです。

中国はそういうことをいうと、内政干渉だというのが、いまの時代でそういう言い分が通るでしょうか。たとえば、昨年

起きた旧ソ連のクーデターでも、ブッシュ大統領は非常に強い態度で、これは絶対に許されない、非合法だといった。あれがモスクワ市民に伝わったのが大きかった。

いまの時代はそういう原理については、国境を超えて、全世界が発言しなければいけないし、そういう時代になってきている。それなのに、日本政府の対中国政策は根本的に間違っている。

——原理原則にかんする問題についてはきちんといいべきことをいう。そのうえで今後日本がやるべきことは。

中嶋 短期的には何かしてあげるとは、何もないんじゃないでしょうか。経済援助を増やせという意見もあるが、増やすぎるとまた反日感情の元になる。根本的に中国自身が中国なりに道を切り開き、自前でいい国をつくっていくということしかないわけで、間接的には留学生の面倒をみるとかというアプローチがいちばんよいのではないのでしょうか。

それを、中国のためとか、一衣帯水とか、同文同種とかいって、情緒的モメントでつきあうのが、いちばんまずい。ほんとうの友好を求めるなら、淡いつきあい方がいいんじゃないと思います。

——中国とつきあうのはなかなか難しいですね。

中嶋 中華思想と白髪三千文式の事大主義の二つが、メダルの表と裏になって、えもいわれぬ中国社会をつくってきた。それはデモクラシーといった原理とは根本的に相容れない

と思うけれども、その三千年来の伝統がいま崩れかけようとしている。最近の中国文学や、中国映画などに見る問題意識はじつに鋭い。そういうものがようやく出てきたのではないかと思います。

——中国人が変わることがありますか。

中嶋 同じ中国人でも香港や台湾を見れば、日本人と同じようになりつつある。変りえるのではないのでしょうか。



日米同盟が目障りな国
おかざき ひさひこ
岡崎久彦 ●元駐タイ大使

——中国の世界戦略、およびこれに対するアメリカの姿勢。そのなかで日本はどう対応すべきかといった点についてお話を伺いたい。

岡崎 初めに一言。天皇・皇后両陛下の御訪中についてはいろいろ議論があり、私にも意見があるが、一度決った以上、それが無事に終ることを期待するほかない。そのためには、中国に対する発言も慎重にならなければならない面もあることはご理解いただきたい。

——米ソ両巨人が争ってくれたといういまの状況は、中国にとって千載一遇のチャンスということになりますか。

岡崎 両巨人とおっしゃるが、私はアメリカは全然くたび

年間の日中関係には、自然に安定する暗黙のバックグラウンドがあった。

それがいま、なくなったわけですから、今度はもつと現実
に即し注意深く取り組み、また慎重にほかの多国間関係のな
かで見ていく。そういう視点がないと危険だと思えます。

——その多国間関係に関連して、米中関係は今後どうなり
ますか。F16の対台湾売却でかなり中国は反発していますが。
中西 中国にとってこれこそ原則面、実地面、いろいろな
面で護歩できない問題だとは思っています。

しかし、口を極めて敵しい対米批判はするでしょうが、は
つきりした行動はとらない。つまり大きくいえば「面子外
交」の形で終始するでしょう。その理由の一つは輸出市場と
してのアメリカの重要性。二つ目には対中強硬路線のクリン
トンよりブッシュのほうがよいに決っている。三つ目は銭其
琛や朱鎔基（二人とも一九二八年生れ）など六十代の指導者の

存在です。彼らは最長老の八十代の権力者と全然違います。

彼らは将来的にはアメリカとの全面的な和解が可能だし、
必要であるというふうに見ているところがあります。この点
は日本もよく見ておかなければいけない。今後「米中関係は
いつそう悪化する」というだけの一時的な構図で見ているは
だめで、中国国内にもアメリカ国内にも、底流としては七〇
年代の「歴史的接近」を再現したいという流れがあります。
いずれにしても、九〇年代を通じ、米中関係はどう転ん
でもいまより悪くなることはないんですよ。これは知ってお
いたほうがよい。そのとき七〇年代のニクソン・ショックのと
きのように、われわれが一喜一憂して走り回るようなことを
したのでは墓穴を掘ることになる。

——今後、日本は中国にどう対応していくべきだとお考え
ですか。

中西 一つは改革開放はよいことをやっているのだから、

縁戚が描く知らなかった漱石

漱石先生ぞな、もし

半藤一利

『坊っちゃん』『三四郎』……だれしも説いたこ
とのある名作から、漱石と彼の時代をユーモ
ラスに振りかえった、ほのぼのエピソード集

定価1300円(税込み)

ほんとうに貧乏に生きた二十三人の男たち

ぜいたく列伝

戸板康二

富を貯え、豪邸に住むことが其の貧乏ではな
い。精神悠々と生きた、吉田茂、大倉喜七郎

定価1300円(税込み) 内田百閒 五代目歌右衛門らの優雅な人生図

文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

日本としても大いにお手伝いしましょうという姿勢でいくべきだと思えます。

しかし他方で悪い傾向もときとして見える。南沙の話もそうだし、軍備拡張、場合によっては日米離間をめざす外交政策が出てくる可能性がなきにしもあらずです。そういう動きに対しては、それはだめですよ、それでは日中友好もおかしくなりますよ、ということを繰り返して厳しくいっていく必要がある。彼らは大国で、外交の民ですが、あるところは大陸的で、いわねなければわからないというところがあります。

お互いに友好を続けるのはもちろんだが、相手が間違ったときや脅威を感じたときは率直にいう。そして話し合う。つまり日中関係も普通の関係にしていかななくてはいけないという事です。



インタビューを終えて——牛場昭彦

“まず友好ありきの危うさ”

きつと北京は悦に入っているにちがいない。

待望の天皇・皇后両陛下の御訪中に加え、その前後に韓国、ロシアのエルツィン大統領がやって来るからだ。

これにより、「近隣二カ国の元首クラスが揃うわけですか

ら、やはり、中国を抜きにしてアジアの問題を解決できないという雰囲気が出てくる」(小此木氏) からのほかならない。

「天皇御訪中と中韓外交樹立は似たような意図から出ている」(小此木氏) とすれば、政府がいくら「政治的意味合いはない」などといいつくろつてみても、少なくとも相手側はあからさまに皇室を政治的に利用していることになる。

「御訪中には問題があるが、決った以上うまくいってほしい」というのは各氏共通の姿勢だったが、うまくいくも何も、中国側にとつては、決っただけで戦略的大得点だったことにもなる。

「第二の天安門事件があるかもしれない」(中西氏) とまでいわれる状況に直面している現政権にとつて、一連の外交的成果によって加わる威信は大きな力になるにちがいない。日中関係だけ見ても、「日本が有利なほうには、何も変らない」(渡部氏) 可能性が高い。

御訪中だけにかぎらず、国際戦略全体の中における日本の位置づけはどのようなものだろう。

中嶋氏によれば冷戦の終結後、とくに湾岸戦争をきっかけに中国は「アメリカが単独覇権を狙っているものと見て、それに対決しようとしている」フシがあるという。訪中した岡崎氏に中国高官が「日中共同してアメリカの覇権主義に抵抗しよう」ともかけたそうだが、相次ぐ招待外交、軍備の大拡張、武器の輸出、尖閣列島・南沙群島の領有宣言などの動

きが、そうした戦略のなかから出てきているものだとすれば、ことは穏やかでない。

その意味で中嶋氏の「中国が盛んに『日本の政治大国化は望まじし』と『さしはじめてゐる』という指摘については、中国側の意図、意味合いを深く考えてみる必要がある。

もつとも重要なのは、御訪中に象徴される新しい日中友好関係を対し、米国がどう出てくるかだ。

現在は大統領選挙の前であることもあり、御訪中についても政府レベルではこれといった反応は出ていない。しかし、対中強硬派の多い議会などには強い反発があるのはまぎれもない事実だし、欧米諸国のなかには一種のアジア主義に対する警戒感も出てきているという。

万一、日本が中国の土俵に引っぱりこまれ、がんじがらめになれば、不信感が一挙に噴き出てくることは確実だ。その結果生じる日米の離間、安保関係の空洞化こそ中国の戦略

的狙いがあるという見方をする人はけっして少なくない。

「人権より国権だ」（渡辺氏）という姿勢を現指導部が変えない、あるいは変えられない以上、米中関係が当分好転するとは思われないが、「いまはともかく、若い指導者はアメリカとの全面的な和解は可能だし、必要だと考えている。中国にもアメリカにも、歴史的接近を再現したいという底流がある」（中西氏）という分析には耳を傾けておく必要がある。

そのときは、米国にとつての日本の価値が大きく変動する可能性が十分あるからだ。

「日中関係を二国間関係だけで考え、多国間関係で考えないのは日本人の悪い癖だ」というのが中西氏の苦言だが、複眼的思考を欠き、「まず友好ありき」だけで突っ走ってはいちばん大事なものを失ってしまう恐れがある。ましてや、功名心、政権の人気浮揚策、利権のバイブづくりといった思惑で日中関係を抜うのは、国家国民に対する犯罪行為なのである。

商品は空気です。

新鮮でクリーンな空気です。

この精気あふれる空気を、人ひとが働き思う場所。

シブシブな環境整備を必要とする空間にお届けすること。

これが大気社の仕事です。



熱と空気のエンジニア
空調設備・塗装プラント 設計施工



株式会社

大気社

東京・西新宿・新宿住友ビル ☎03(3344)1851

大阪・中之島・住友中之島ビル ☎06(448)5851